

現役時代の合宿所生活

31期 中島 弘高

はじめに

私たちの現役の頃は、練習は合宿生活が基本。学校が終わったら平日でも合宿をしていた。ボートの成績を上げることとは別に、ボートに関わる者にとって学生生活を豊かにした合宿生活経験。多くの諸先輩方が礎を築いてくれたおかげで、大変楽しく、時に厳しく、生活することができた。私を育ててくれた、中央大学漕艇部合宿所での経験。関係者の御礼を込めて、当時のエピソードを執筆させてもらった。

最近の現役学生は中大艇庫までの通い練習が中心。合宿所での早朝の掃除とか晩飯の炊き出しの経験なんて想定もつかないだろう。しかし、合宿していることのメリットも感じてほしい。再び実践したいのであれば、オール中央の仲間意識を高めたいと願う監督としても幸いである。学生時代にしかできないことを、学生自身で創り出すように、工夫して考えてほしいと願う。

合宿所と理工部屋

理工学部学生は合宿所内の1階奥にある「ミーテングルーム」と書かれた通称「理工部屋」を利用させてもらっていた。

本チャンの部屋は2階にあったが、風呂やトイレ、洗面台は共有だった。

このため合宿所生活は、お互いのルールを決めて場所のやり取りを行い、寮費の扱い／合宿日程／合宿中の支援作業も共有して合宿所に入っていた。主務は毎週やり取りを行っており大変だった。

私たちの代になると、人口密度はハンパなく、15畳の部屋に15名が布団スペースだけで過ごしていた。キャパシティが溢れ、足りなくなった場合は国立艇庫も利用していた。

部屋には洗濯物を干すためのロープが張り巡らされ、そこにかけられたタオルや練習着によって、空間がセバレートされていた。

上級生は大抵、部屋の奥に陣取り、下級生が入り口近くで過ごしていたため、下級生の布団はいつも砂だらけになったり、朝食の汁で汚れていたものである。

据え付け型のクーラーを窓に設置し、テレビや冷蔵庫も設置して最低限の空間は確保できていた。

私自身は、実家から別の冷蔵庫や使い古しの絨毯を持ち込んだり、食堂でカレー作りを行ったり、自由気ままに合宿所生活を楽しんだ。夜のイビキがうるさかったり、寝起きが悪いなど同期に迷惑をかけていたこともあったが、現在ではいじり話のネタともなっている。

授業があるときのルーティン

月曜日は授業が終わった夜 22:00、理工部屋でのミーティングが集合時刻。それまで皆風呂に入ったり、土日のハプニングに話を咲かせたり、のんびりテレビ鑑賞など。

ミーティングでは事務練絡が中心。初日は元気いっぱい 22:30 就寝時刻。

火曜日、1年生は 4:00 に起床。朝のお勤め開始。廊下掃除班、玄関掃除班、風呂掃除班、食堂掃除班。掃除がいい加減だとチャンの上級生から睨まれ、理工の上級生が怒られるので、手抜きできない。

5:00 から 2 年生以上が起床。速やかにストレッチ。チャンは 5:00 起床で体育館集合のため体育館でのストレッチは利用できず、理工の学生は理工部屋内の自らの布団の上でストレッチを行っていた。コックスは寒い中上着を着こんでコックスボックスを持って艇庫へ。漕手は 400m のジョギングを行い艇庫集合となる。チャンとの練習開始タイミングが被るので、ミーティングも手短めとにかく急いで出艇。エイトの場合はコックスボックス設置などに時間がかかるので段取りが命。

乗艇開始すると、あっという間に他大学もコースに集結するので混んでくる。乗艇後は大抵、ファイナル練習の腕漕ぎから入るが、全員が実施できるかはコックスの腕にかかってくる。

朝練は出艇後、コース 2 周したら大抵時間がないので練習終了となる。

ちなみに、乗艇中に腹が痛くなる輩がいると練習時間が切り上げられる。練習が佳境になってからの状態になると、その輩はクルーから大変な響きを買ったものである。

練習終了後のミーティングは練習以上に長かったのも理工の特徴。

エイトはとにかく時間がかかった。自分の思いをひたすらにぶつけて皆が無言になる。



朝練が終わったら毎日同じ味の朝食となる。野菜炒め、納豆、卵、つけもの、ごはん、味噌汁。野菜炒めは、2 限から始まる 1 年生の仕事。先に野菜を炒めておいて盛り付けまで終えてから練習に参加していた。逆に先に練習していた漕手は、1 限の授業に参加する場合は速やかに朝食。どんなに急いでいても朝飯は有料なので欠かさない精神だった。

7:20 合宿所を出て、7:40 に戸田公園駅へ。このあと激混み埼京線との戦いが待っている。男なのに痴漢にあった仲間もいた悪烈環境。こんな環境が追い打ちをかけ、くたくたで後楽園へ。

さらに富坂の上りで疲れを押し上げて、8:40、授業が始まる。

こうなると当然、睡魔に襲われることとなる。意思が弱い私などは、ついイビキをかきながら授業中に寝てしまい、先生から厳重注意だ。

昼休みは部室で寝るものが決まっている。理工ボート部の部室は大きく場所を確保していたが、部室

シートはいつも満席だった。

しかし私はせっかくの学科仲間と学食で食事をとることにしていた。昼休みに寝ることができないが、ボート部以外でコミュニケーションを取るチャンスも忘れてはいけない。

学校が終われば戸田で夕練が待っている。

コックスは早々に艇に懐中電灯をセットし、乗艇の準備に抜かりがない。夕練は朝練より時間が取れたため、しっかりミーティングしてしっかり3周が基本。19:00近くまでクタクタに乗艇した。

一方で夕食の準備が必要だった。チャンから理工の夕飯を取ってもらっており、自分たちで食事を作った。ボリュームも多く、チキンソテーや厚揚げなど安価で良質なたんぱく質をガッツリ食べることができた。皿洗いや鍋洗いは理工の担当。そして翌日に向けた野菜のカット、通称「ヤギリ」が1年生の夜の仕事として残っていた。

並行して風呂の時間である。風呂に入るとチャンの上級生がいる可能性があるがあるので、しきたりがあった。大きな声で失礼します！お先です！

そして理工の上級生ともなると、チャンの下級生からも同じ掛け声を言ってくれるようになる。なんとなく嬉しくもあった瞬間だ。先輩・後輩、裸で浴槽につかると、チャンも理工も関係なく楽しく話に花が咲いたものだった。チャンの先輩にキャッチのテクニクから女を口説くテクニクまで、楽しく問いかけて来たことはいい経験であった。

一方、本業で実習や実験／ゼミ活動が佳境になると、理工学部学生にとっては、どうしても時間が足りなくなる。学生たちは手書きのレポート材料を引っ提げて、消灯後、合宿所の食堂でレポート作成や勉強に励むことも多々。眠い目をこすり、ときに2時間くらいしか寝られずに、朝練に突入することもあった。レポートの作成期限は、自らの体力の限界といった指標も生まれたようだ。



金曜日の朝、合宿が終わる。

いつもと同じルーティンで目覚めなければならない。

疲れが溜まってきて大変眠い。寝起きでストレッチをするのだが、ストレッチのポーズのまま寝ている輩も出てくる。そんな寝ている奴には、起きた奴から蹴りが入って起こされる。皆不機嫌なまま朝練の乗艇に向かうのだ。

チャンの学生は本当に学校に行けるのだろうか。彼らの体力と生活力には改めて尊敬したものだ。

合宿上がりの日。フライの到来である。

私たちの頃は戸田全体で、休みの日をフライ（Frei：ドイツ語。Freeと同意）と呼んでいた。半休はセミフライと呼んでいた。はじめは何のことかと不明だったが、「休み」に親しみを込めることで、こう呼ぶのはすぐ理解できた。

フライとなればやっと実家に帰れるのだが、多くの仲間はバイトを入れたり、麻雀大会になったり、合コンに行ったり。

思えば最強の体力を持って余っていた時期だった。

長期休暇中での合宿のルーティン

月曜日の朝 10:00、中央大学漕艇部合宿所に集合となる。

すぐに練習開始となるのだが、決まって遅刻者が出る。

昔は携帯電話もなかったので、合宿所に直接電話。電話番号（なぜか忘れない）、048-444-1591、今も変わらないらしい。

月曜日は荷物も多くて戸田公園駅から合宿所まで移動も大変なのだが、みんな文句言わずよく歩いてきたものだ。

※私は、学校の生協で自転車を購入し、戸田で防犯登録して市民のラベルを貼って、戸田公園駅の駐輪場に年間契約していた。やる価値はとても高い！

さて、艇庫に集合したあとは早速練習開始。

学校がないときは、夏でも冬でも朝・昼・晩の3部練になった。

集合した日は昼練からスタート。昼はコースも空いており、一番リラックスして練習できる。

細かいテクニック練習はこのタイミングでの実施が多かった。

しかし夏の昼は灼熱地獄だった。

よくボートは水上で涼しそうであらやましいと言われたこともあるが、日陰もないし風が吹かないコースは、熱が逃げなくて体力を奪っていった。

練習が終わってもいつまでも暑く、理工部屋にクーラーがなかった時代は大変な暑さ。おそらく今でいう熱中症になり、せっかく買ってきてもらった「ランチジャック」ののり弁当が喉を通らなかったこともしばしば。仕方なく、元「中華楼」近くの蕎麦屋、「満留賀」に行って冷やしタヌキしか食べられなかった程だ。

それでも昼練が終わったら夕練まで休憩。理工部屋は人口密度が高く、クーラーが効かない。

このような状況のため、私たちはよく艇庫で水浴びしていた。艇庫前をたくさんのボート関係者が通過するため、全裸になることは自制したが。

いずれにしても、急病に繋がる部員はおらず、みなのパイタリティには感服していたものである。

夕練になるとコースに一気に人が増える。もちろん乗艇することもあるが、安全配慮から夕方は陸トレにすることが多かった。

ウェイトやランニング、時にはリクリエーションも。

ウェイトはメニューを各人に任せていたが、私は割としっかり実施。プレス 100 kg、スクワットは 240 kg を上げることができ、私はゴリマッチョ体型に育っていった。



夏はさらに風呂の湯が出なくなるので、銭湯に通うことも多かった。

これに合わせて休暇中合宿の夕食は、毎晩皆で外食をしていた。当時は、中華楼・おけさ・酔月園・国谷・不二家といった店に通っていた。(今はほとんどなくなっている)

外食は費用が掛かるが、コミュニケーションも取れる楽しい時間。合宿時とは違う会話もできてさらなる溶け込みができた。食事が終わってから戸田の地元の盆踊りに参加したこともあった。

ちなみに、キャプテンがしっかり指示していたので、みな消灯の 22:30 は守るように戻っていた。

当時、タバコを吸う連中は裏口から抜け出して公園の隅でホテル族になっていた。

毎学年に必ず喫煙者が居たが、彼らはその場でうまく悩み相談を行っていてコミュニケーションを活性化していたようである。

今では考えられないが、公園の扱いも緩やかで自動車が夜になると沢山入ってくることもできた。

コースわきの路上はカップルで溢れかえり、車上でロマンスが営まれていたシーンを私たちはたくさん目にすることがあった。

一度、中大艇庫出口の前に陣取っていた半裸のカップルがいて、みんなでニヤニヤしながら追い出した記憶がよみがえってくる。

また彼女や思いのある部員は、夜になると近くの公衆電話に赴き、相手と電話をすることがしばしば。戸田公園内の電話ボックスも多くなく、ボックス前に並ぶこともあった。

今と違い、まずは相手のお母さんと会話と会話が始まるスタイルでテレホンカードを多用していた時代である。親御さんとのご挨拶や、テレホンカードをいかに安く買うか、そんなスキルが自然と身についていた。

合宿生活を通じて得られたこと

合宿は純粋にボートを鍛錬するより、どちらかという和生活力と人生観を学んだ期間だった。もともと人生観に疎かった自分が、たった3年間で大きく成長できたことを感じている。



合宿生活は、物事に対するエンゲージメントを向上する良いきっかけだった。監督になったのもこの結果で得られた自信があってから。やってみれば結果を残せる精神、ボートとの生活でこれが培われたと感じている。

チャレンジこそすべてを変えられる。
今後の現役諸君、合宿生活もぜひトライだ！

以上